

堀内 大介

(埋蔵文化財センター主任学芸員)

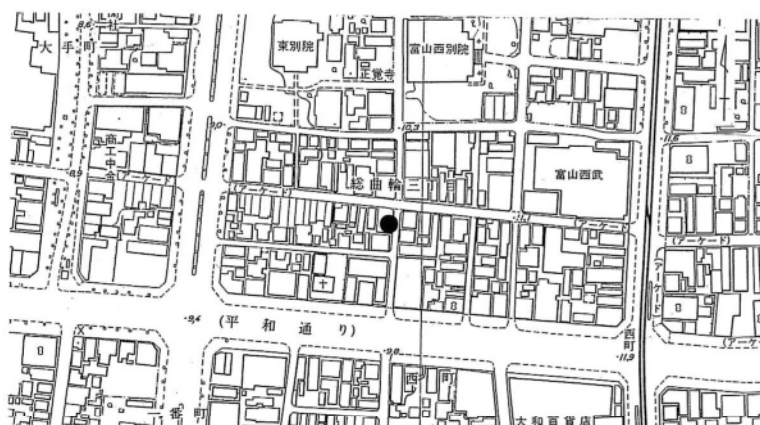
1 はじめに

富山城跡は西町・総曲輪地区市街地において再開発が計画され、平成16年4月にはグランドパーキング「CUB Y」建設に伴う調査を行い、複数の井戸跡等が検出され、17世紀代の陶磁器類を多数出土した。調査部分は富山城下町絵図と比較すると、岩田宇兵衛屋敷と推定される。

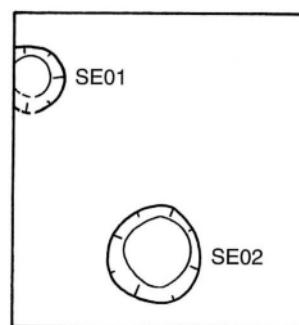
平成18年1月には再開発ビル「フェリオ」建設に伴う調査を行い、石組水路や排水溝等が検出され、17世紀～19世紀の陶磁器類、下駄、木札、武官を描いた板絵等の木製品等を多数出土した。富山城下町絵図と比較すると、石組水路は武家屋敷地と町屋敷地とを区画する背割下水に符合し、排水溝は天保期の武家屋敷境の溝と符合した。

今回の調査地は、「CUB Y」と「フェリオ」の間に建設されたグランドプラザの建設に伴い、工事立会調査を行った。床下収納庫（可動式舞台）の工事箇所（南北8.8m、東西7.7mの長方形の掘削範囲、第1図）において、井戸2基が確認された。そのため、富山市都市再生整備課と富山市教育委員会埋蔵文化財センターとの間で埋蔵文化財保護について協議を行い、すぐに調査を行うことで合意し、調査を行った。調査は、平成18年10月4日から10月7日にかけて行った。

平成19年度には、出土した井戸側と釣瓶を「高級アルコール法」にて保存処理を行った。



第1図 調査位置図 (1:50000)



第2図 遺構図 (1:200)

2 調査概要 (第2・3・4図)

今回2基の井戸が発見された場所は、元々は鉄筋コンクリート造の建物が建っていた場所であったため、本来の遺構検出面は建物基礎によって破壊されており、その他の遺構は検出されなかった。見つかった遺構が井戸であったので、深い部分である井戸下部が残存していた。

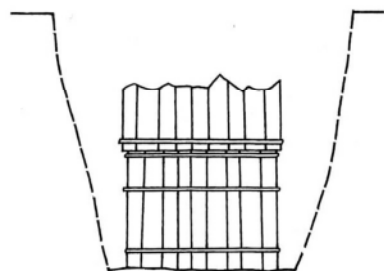
SE01は工事箇所北西部で見つかっており、GLより2.8m下で検出した。南西部分の1/4は隣接する「フェリオ」の工事による攪乱のため破壊されていた。検出面での掘方の平面形は円形で、直径は1.8m（西側は工事区外となる）、深さは約1.3mを測る。検出面より40cm下から井戸側が確認された。井戸側は円形で、直径約85cmを測る。井戸底に



井戸側 (下段) 状況

水溜め施設は確認されなかった。

SE01は、宇野氏の分類に当てはめると、B 類桶積上げ井戸に分類され、桶は井戸専用の縦板組タガ巻きである。残存していた井戸側は2段確認されたが、上段は既に上部が腐食しており、下部約30 が残存していただけであった。上段と下段の重なりは約5cmであった。側板を竹のタガ（一部のみ残存）で留めており、下から5 で1箇所確認できた。下段には27枚の側板が残存していた（表1）。側板は竹のタガで上（7cm）、中（25cm）、下（57cm）3ヶ所を留める。上部から7～8cmの位置で側板を木釘で繋ぎ合わせてある。井戸側は樹種同定の結果、ヒノキ科アスナロ属に分類される。

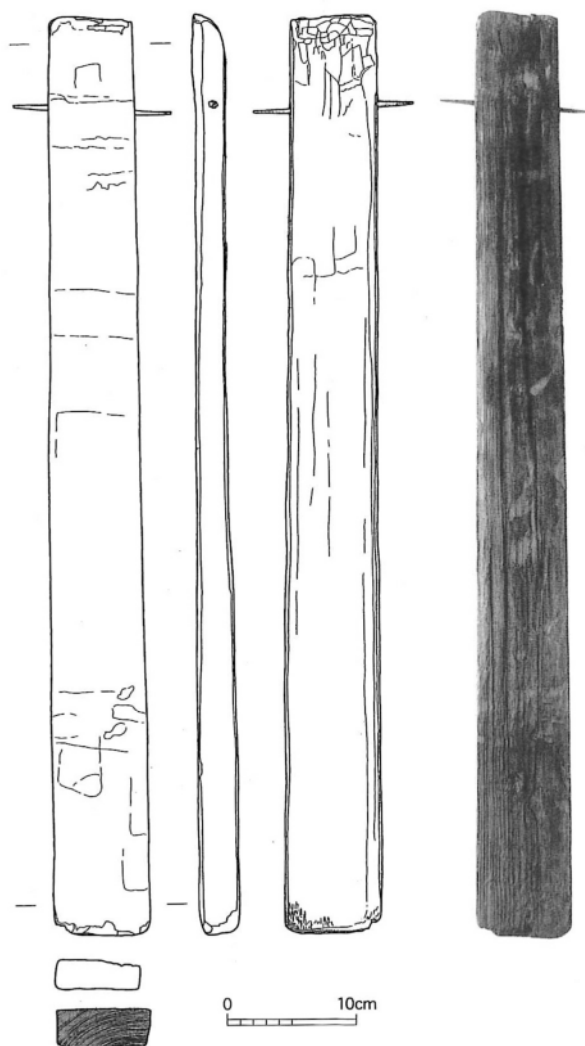


第3図 SE01井戸側断面図

部位	幅(cm)		高さ (cm)	厚み (cm)
	上	下		
右①	8.5	9.3	72.5	2.8
	9.5	10.5		
右②	6.5	7.5		
	8.8	10.0		
右③	9.7	11.0		
	8.7	9.5		
右④	6.1	7.2		
	6.9	7.8		
右⑤	10.5	10.9		
	8.5	8.8		
右⑥	6.0	6.7		
右⑦	10.5	11.9		
右⑧	6.3	7.2		
右⑨	9.2	10.2		
右⑩	10.5	11.0		
左①	7.2	8.0		
左②	11.5	12.0		
	6.1	6.9		
左③	8.5	9.8		
	9.2	10.5		
左④	6.8	8.5		
	10.9	11.6		
左⑤	7.0	7.8		
左⑥	10.4	11.1		
	6.8	7.5		
左⑦	8.0	6.4		
左⑧	6.5	7.0		

表1 井戸側（下部）観察表
（○数字は取り上げ順番）

SE02は工事箇所南部中央で見つかった。検出面での掘方の平面形は円形で、直径は2.6m、深さは約1.4mを測る。井戸底は、水溜めのために1段深く掘り窪められていた。水溜め部分で竹のタガが円形に確認され、何らかの水溜めの施設が据えられていたと考えられる。



第4図 井戸側（左⑤）実測図 (S=1/6)・写真

3 釣瓶について（第5図）

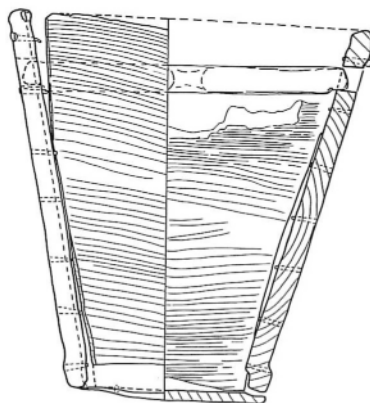
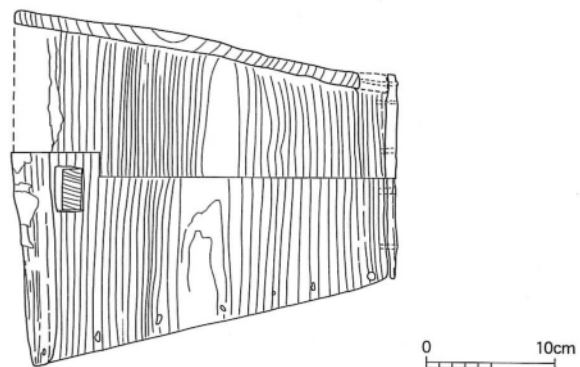
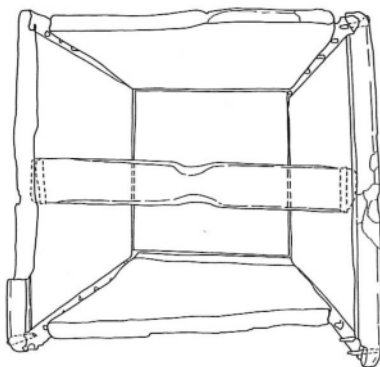
SE01の底から出土した。高さ31cmを測る。加工された側板と底板は木釘ないしは鉄釘で結合される。結合部分は一段薄く削られている。側板の口縁付近に方形孔が開けられ、取手が付けられていたと思われる（出土時、取手は外れていた）。取手は真ん中部分が挟られており、縄をかけるためと考えられる。樹種同定の結果、底板及び側板2枚はヤナギ科ハコヤナギ属、側板2枚はマツ科マツ属〔二葉松類〕、取手はブナ科ブナ属に分類され、各部位が異なる木材を使用して作られていることが分かった。

部位	縦 (cm)	横 (cm)		厚み (cm)
		上	下	
底板	16.5	16.5		1.0
側板	30.3	28.5	16.5	1.7
	30.3	28.5	16.5	1.7
	28.0	23.8	12.3	1.3
			12.7	1.3
取手	3.5	25.8		2.1

表2 釣瓶観察表



SE01 釣瓶出土状況

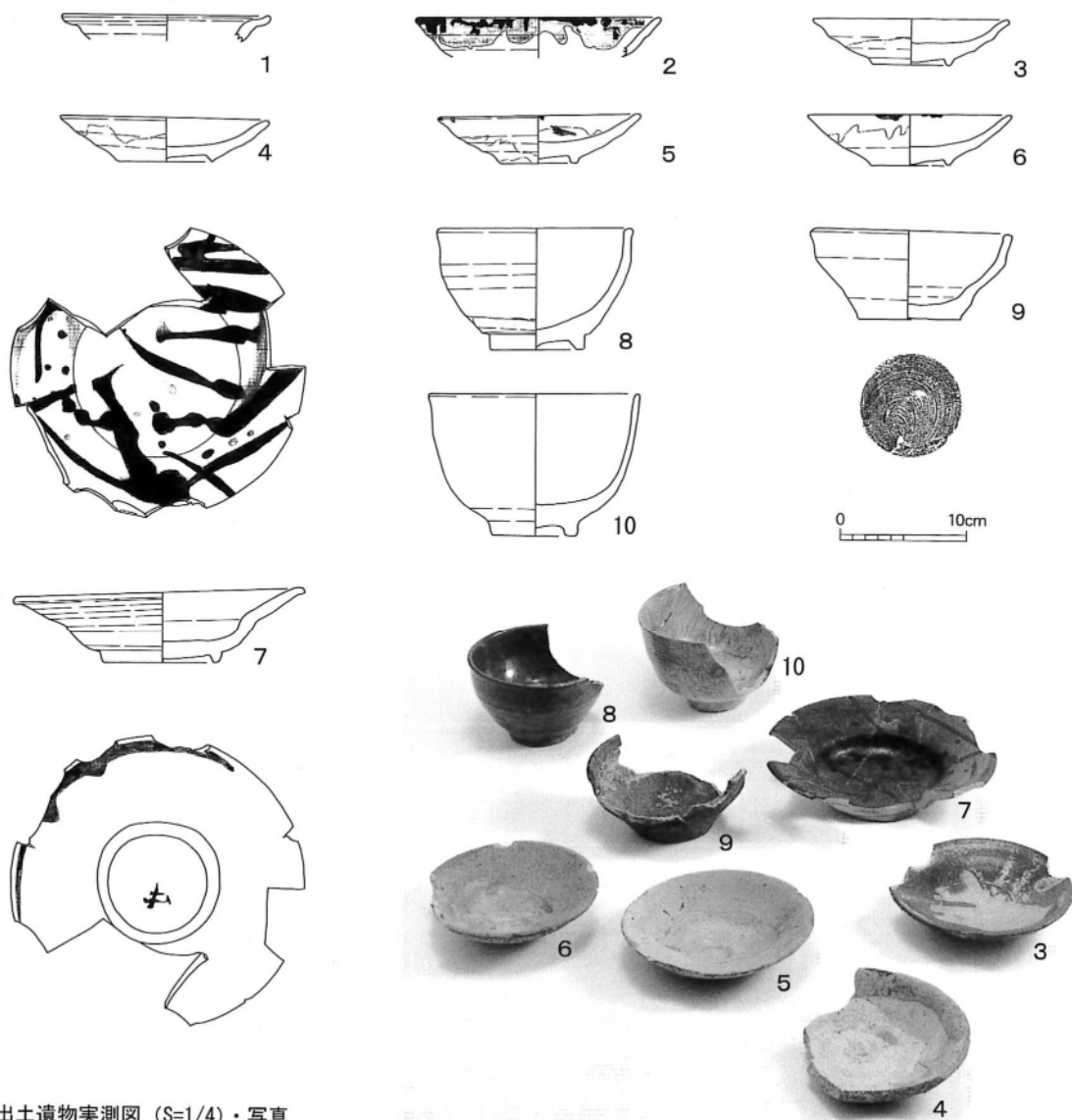


第5図 釣瓶実測図 (S=1/6)・写真



4 出土遺物について（第6図）

- 1は井戸の掘方、1以外は井戸側内出土である。1は井戸掘削時の混入とみられる。
- 1は瀬戸美濃の折縁小皿である。大窯後Ⅲ期（15世紀前半）に比定される。
- 2はかわらけである。口縁部に煤・タール痕が確認でき、灯明皿として使用していた。
- 3～9は越中瀬戸である。3～7は皿である。3～6は削り出し高台の丸皿で、内禿げ皿



第6図 出土遺物実測図 (S=1/4)・写真

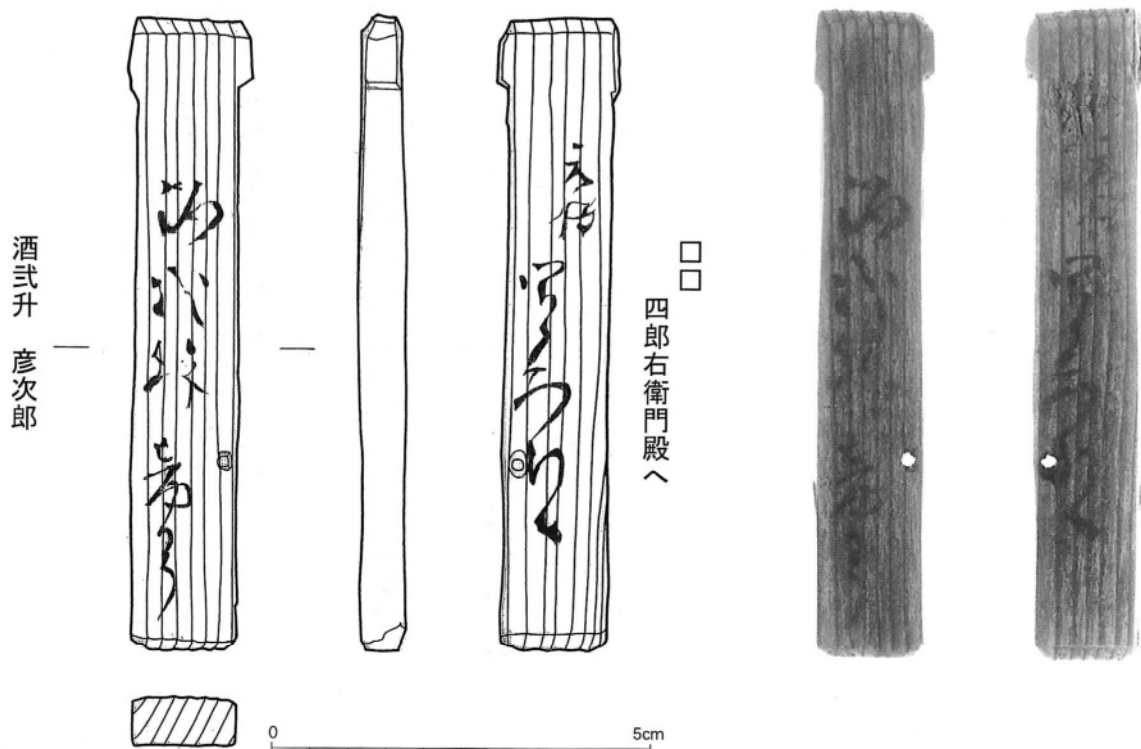
である。口径から大皿に分類される。外面体部下半から高台にかけては露胎である。3は鉄釉、4～6は灰釉を施される。3・4の見込み部分には重ね焼き痕が残る。5・6は口唇部に灯心油痕が残っており、灯明皿として使用していた。7は絵唐津風皿である。口径から特大皿に分類される。内面に鉄釉を使用して文様が描かれており、絵唐津を模倣したものと考えられる。外面高台内側に墨書で「中」の字が施されている。8・9は碗である。8は丸碗で、高台は輪高台である。外面体部下半から高台にかけては露胎であり、鉄釉が施される。9は底部糸切り痕が残る。内外面全面に鉄釉が施される。17世紀第2四半期～第3四半期に比定される。

10は唐津の碗である。高台は露胎とし、他は全面に透明釉が施される。細かい貫入が内外面全体に入る。見込み付近に重ね焼きの砂が付着する。1650～1690年代に比定される。

その他、伊万里・箸・建築部材等出土している。

5 木札について (第7図)

井戸側内から出土している。高さ8.4cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmを測る。上部1cmが0.2cm分厚くなり、「T」字状を呈する。下半部に直径2mmの孔が開けられている。表に「□□ 四郎右衛門殿へ」、裏に「酒式升 彦次郎」と墨書がある。彦次郎から四郎右衛門へ酒二升を送った際の荷札と考えられる。



第7図 木札実測図 (S=1/1)・写真

6 絵図・史料との対比

調査地は、『万治年間富山旧市街図』（1658～1661年）・『寛文六年十月御調理富山絵図』（1666年）では、吉田甚五兵衛屋敷、『御城内外御焼失御絵図面』天保年間（1830～1844年）・『越中富山御城下絵図』安政元（1854）年では町会所（町役前）に該当する。

吉田甚五兵衛は、貞享3（1686）年の『富山藩武鑑』では馬廻組普請奉行（貳百石）とあり、元禄3（1690）年の『正甫公御代分限帳』では、小姓組目付（貳百石）とある。天保9（1839）年の『富山藩士由緒書』では、吉田甚五兵衛良恕は明暦元（1655）年に金沢より御当地（富山）に引越してきたと記されている。

7 まとめ

出土遺物や絵図・史料から見ると、17世紀第二四半期～第三四半期の富山藩成立前後の井戸であり、吉田屋敷に伴うものか、それ以前のもので吉田屋敷建築の際に廃棄されたものかもしれない。

本稿作成にあたり、宮田進一氏、浦畑奈津子氏の有益なご教示を得た。

（参考文献）

- 宇野隆夫 1989 「井戸考」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 総曲輪通り南地区市街地再開発組合・富山市教育委員会 2006 『富山城発掘調査報告書』
- （財）富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 1996 『梅原護摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
- 富山市教育委員会 2005 『富山市富山城跡発掘調査概要』
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』
- 堀内大介 2007 「近世富山城下町の暮らし」『富山市の遺跡物語』No. 8 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』